

幼児期の造形体験が中学生に及ぼす影響 —アンケート調査結果からの検討—

榎 英子^{1)*}

小橋暁子²⁾

¹⁾淑徳大学・総合福祉学部

²⁾千葉大学・教育学部

Effect of art experience in early childhood to junior high school students —Examination by the questionnaire survey—

MAKI Hideko¹⁾ KOBASHI Satoko²⁾

¹⁾Faculty of Integrated Human and Social welfare studies, Shukutoku University, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、幼児期の造形体験はその後の成長に影響するののかについて、ある幼稚園（A園）で、豊かな造形表現活動を体験した子どもたちが在籍する中学校において、アンケート調査を行い検討した。筆者らは、2001年～2007年に共にA園で、子どもの表現傾向と自発性を尊重した造形表現指導を行い、今回対象とした中学生もその時期に在園していた。アンケートでは、その影響を幅広くとらえるため、「各教科の学習に関する意識」、「部活動への取り組み」、「普段の生活状況」、「幼稚園や保育園（所）の思い出」「習い事」等を質問した。A園を卒園した群とそれ以外の群との比較から検討した結果、曖昧さは残るものの、A園卒の生徒は「美術」を好む比率が高く嫌いな生徒がいないこと、表現力や思考力が求められる教科を好み、幼児期の造形体験をよく覚えている傾向があることがわかった。

キーワード：幼児教育（Pre-school education） 造形活動（Art activity） 中学校（Junior high school）
追跡調査（Follow-up research） アンケート調査（Questionnaire survey）

問題と目的

筆者らは、私立幼稚園の保育時間内において、幼児の造形表現活動の指導を担当し、だれもが表現を楽しめる環境の構成に関する実践研究に取り組んできた。当初は、空き教室の活用から始まったため、常設の室内に多様な遊びや造形活動の場を設定し、その選択状況から表現傾向の偏りを見出し、援助の手がかりとなる知見を得た（榎、2006）。その後、空き教室の消失によって別棟が設置され、各クラスが週1回程度訪れて、造形表現活動を楽しむ場となったため、教材提示とその選択状況調査からよりよい実践を探索するアクションリサーチを行った（榎、2008）。その結果、教材の選択傾向にも偏りがあることが明らかになり、その選択率から教材を評価し、実践の改善を継続している。また、年度末には、目的をもち協同して取り組む活動として、遊びの広場の実践を行っている。2001年から2007年については、筆者らが共に指導にあたり、2003年には、「宇宙」をテーマにしたプロジェクト型の造形表現活動に取り組み、実践を公開し、学会発表を行った（榎、2004）。こうした研究経過を経て開発された本実践は、幼児の表現傾向や自発性を尊重し多様な表現を援助することによって、造形表現力だけではなく幅広い育ちを期待した独自のものであり、実践園の保育内容を特徴づけている。また、保護者に対しては、子どもは遊びや表現の過程で学ぶこと、意欲を持って自分の手でつくる体験が自信と技能の両方を徐々

に育てていくこと、作品の出来栄より子ども自身を大切にすることを実践であることを伝えている。

本研究の発端は、この実践園の卒園児が数多く在籍している中学校に赴任した美術教諭から、美術部に複数の卒園児が所属しているという情報を得たことである。特に、在籍する中学生が在園していた時期が、筆者らが共に指導にあたり、造形表現活動に関する熱心な取り組みを行った時期であったことから、幼児期の造形体験の影響について検討できるかもしれないという期待をもった。

中学校に至るまでの小学校教育や家庭環境の影響の大きさを考えると、幼稚園での造形体験と中学生の現状を結びつけてその関係を検討することには慎重であるべきであろう。幼児教育の効果を測定し、明らかにすることが困難であることは自明のことである。とはいえ、幼児教育が生涯にわたる人格形成ならびに義務教育及びその後の教育の基礎を培うことを目指しているのであれば、義務教育の最終段階である中学生の姿にも、なんらかの影響がみられるはずである。造形表現活動についても、幼児期に優れた作品を残すことを最終目的に行われるのではなく、豊かな感性や表現する力、創造性を培うことを目指している。その妥当性は、その後の学習や表現活動の中で開花することによって示されるのではないだろうか。

ところが、造形表現の領域に限らず、幼児教育全般において、縦断的な研究が乏しいのが現状である。造形表現に関する縦断的な研究としては、幼児期から青年期までの発達過程を示した事例的な研究成果（たとえば東山・東山、1999）はあるが、対象児が集団教育の場でう

*連絡先著者：榎 英子

けた幼児教育の影響については触れられていない。多様な幼児教育が展開されている現状において、幼児期にふさわしい教育の在り方を考え、子どもの成長を長期的な視点でとらえる研究が、求められているのではないだろうか。

以上から、同じ幼稚園に通っていた中学生たちの傾向の偏りの有無や特徴から幼稚園教育の影響について考察することは、幼児教育の在り方を検討する手がかりとして有用なのではないだろうか。

本研究は、こうした観点から、中学生を対象とし、幼児教育における造形体験の影響について、あえて造形的な側面に限定することなく検討するものである。前述のように、影響の有無やその内容の検討には丁寧な手続きが求められる。多面的な検討を行う必要があることから、本稿においては、その一方法として行ったアンケート調査の結果について検討し、幼児期の造形体験の影響を考察する手がかりを示すことを目的とする。

方 法

1. 調査方法と内容

アンケート調査は、以下の手続きで行った。

- 1) 調査対象 A市立A中学校在学 239名
- 2) 実施時期 2011年12月
- 3) 実施方法 美術の授業時間内に行ったが、無記名とし、テストではないことを明記した。質問項目は、主に学校での勉強のこと、学校以外での過ごし方、美術の学習について、小学校入学前のことに関するものであるが、本稿で分析対象としたのは、以下のとおりである(表1)。調査項目の作成にあたり、幼児の造形教育の影響は、図工美術の領域だけにとどまらないと考え、中学校生活全般に及ぶものとした。また、幼児期の教育の幅広い影響をとらえるための項目も加え、

他の中学校との比較を想定して一部についてはベネッセ教育研究開発センターが2006年に実施した「学習基本調査」の調査項目を参考にした。

なお、実践園は「A園」とし、その卒園者である中学生を「A園卒」、その他の場合は「他園卒」と表記し、「他園」を幼稚園と保育所(園)に分けて検討する場合は、それぞれ「他幼卒」「他保卒」とする。

2. 分析方法

1) 小学校教育の影響の検討

中学生は、小学校教育の多大な影響を受けている。そこで、「A園卒」群の中学生の傾向や特徴を幼児教育と関連付けるためには、小学校教育の影響が他の群と大きく違うことを示す必要がある。各群の出身小学校の比率を示して検討する。

2) A園を卒園した中学生の特徴の検討

A園を卒園した群の特徴を、その他の群と比較する。主にアンケートで得られたデータから検討し、明らかにした特性から、幼児期の影響について考察する。

3) 幼児期の造形活動の記憶についての検討

幼児期の造形活動に関する記憶があるかどうかをたずねた結果から、幼児期の造形体験の影響について考察し、事例的な検討を行う。

結果と考察

1. A中学校の生徒について

調査の結果、A中学校の生徒は、主に3つの小学校の卒業生によって構成されており、A小学校が約44%、B小学校が約31%、C小学校が16%であり、その他は9%であった。就学前については、幼稚園出身者が71%、保育所(園)出身者が29%であった。また、A園卒園者については、69名のデータが得られた(表2)。

表1 質問項目内容(分析対象としたもの)

質 問 項 目	調 査 内 容
回答者について	1) 学年 2) 性別 3) 卒業した小学校名 4) 卒園(修了)した園(所)名
教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか *あてはまる番号に○をつける	1) 国語 2) 社会 3) 数学 4) 理科 5) 英語 6) 音楽 7) 美術 8) 体育 9) 技術・家庭 10) 総合的な学習の時間 *「とても好き-まあ好き-どちらともいえない-まあ嫌い-とても嫌い」の五段階評定
普段(学校の授業や宿題以外で)次のことをどのくらいしますか。 *あてはまる番号に○をつける	1) 本を読む 2) 新聞のニュース欄を読む 3) 美術館や博物館に行く(頻度) 4) ペットや動植物の世話をする 5) 読みたい本を本屋で探して買う 6) 読みたい本を図書館で探して借りる 7) ゲームをする 8) パソコンでゲーム以外のことをする 10) 習い事に行く(内容と年数) *「よくする-時々する-あまりしない-ほとんどしない」の四段階評定
部活動に入っているか *あてはまる番号に○をつける	1. 運動部に入って積極的に参加 2. 運動部だがサボりぎみ 3. 文化部に入って積極的に参加 4. 文化部だがサボりぎみ 5. 入っていない (入っている部活動は?)
小学校入学前のこと	1) 幼稚園や保育所(園)で楽しかったことはどんなことか 2) 幼稚園や保育所(園)で絵を描いたり何かをつくったりしたことを覚えているか 覚えているのはどんなことか 3) 幼稚園や保育所(園)の頃にしていた習い事(スポーツ・音楽・造形・英語・勉強等)を覚えているか 覚えているのはどんな習い事か

表2 A中学校の生徒の概要

データ数		性 別		卒業した小学校				卒園（修了）した園（所）		
学年	人数	男子	女子	A小学校	B小学校	C小学校	その他	A幼稚園	他の幼稚園	保育園（所）
1年生	73	38	35	21	28	13	11	13	32	22
2年生	87	40	46	43	25	13	5	23	37	26
3年生	79	35	44	40	20	12	6	33	28	17
全 校	239	113 (48%)	125 (52%)	104 (45%)	73 (31%)	38 (15%)	22 (9%)	69 (30%)	97 (42%)	65 (28%)

*数値は判別したデータ数であり、未記入や不明者の数は加えていない

表3 各教科の学習が好きな生徒の割合

		国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技術・家庭	総合的な学習
全 校		45.2%	48.9%	40.9%	45.7%	50.2%	65.0%	77.8%	77.4%	73.3%	58.8%
男 子		39.6%	58.4%	50.5%	66.0%	42.0%	50.5%	68.3%	83.2%	68.3%	50.0%
女 子		51.3%	41.2%	33.1%	28.8%	57.6%	77.1%	86.6%	73.1%	78.2%	66.4%
2 年 生		39.1%	43.7%	44.2%	48.8%	43.0%	67.8%	74.7%	72.4%	73.6%	58.1%
Benesse2006		42.1%	41.1%	45.0%	53.1%	39.4%	47.2%	49.0%	67.1%	45.6%	42.0%

Benesse2006：Benesse教育研究開発センター2006年より転載

学習に対する肯定感について検討する。それぞれの教科を好きだと答えている生徒の割合については、2006年のベネッセによる全国調査（2年生を対象）の結果と同じ2年生について比較すると、表現や実技系の科目が高い傾向が見られる（表3）。

なお、教科の好みに見られる性差については、ベネッセの報告で男子が10ポイント以上高いとした4教科の「社会」「数学」「理科」「体育」において、同様に男子の方が高い傾向が示された。

2. A園卒の中学生の集団特性

A園卒の中学生69名は、A園の2003年度の3学年の在籍数が280名というデータから、全卒園者の4分の1弱であることが推察される。本研究は追跡研究であるため、全員を対象とすることはできなかったが、ここでは、A中学校在籍のA園卒園者の特性について検討する。

本研究の目的が幼稚園における特別な保育内容の影響の検討であり、幼稚園と保育所（園）では生活時間や保育内容が異なることから、その他の中学生を、幼稚園卒園者の「他幼卒」群と保育所（園）修了者の「他保卒」群に分ける。

2-1 性別の比率

A園卒の生徒の性別比率を他園卒と比較する（表4）。

以上から、A園卒群は女子の割合がやや高い傾向があるが、他幼卒群もほぼ同じ比率である。ただし他保卒群

は男女の比率が逆であることから、性差がある特徴に関して比較する際は、配慮が必要であると考えられる。

2-2 小学校教育の影響

中学生は、その直前の小学校教育の影響を強く受けていると考えられる。幼児教育と異なり、同じ市内の学校は同じ教科書を使用するため、学校間格差はほとんどないと考えられるが、教科によっては、専科教員の有無や施設面、研究指定等によって若干の違いを想定する必要があるだろう。各群の出身小学校の比率に偏りがあるかを検討する（表4）。

その結果、最も高い比率がA園卒群内のA小学校の比率の52.2%であり、特定の小学校に大きく偏っている群はないことが明らかになった。ただし、詳細について検討すると、A園卒群と他幼卒群は、A小学校の比率が最も高いのに対して、他保卒群ではB小学校の比率が最も高いなど、その比率に違いがあった。本稿では、A園卒群の特性を検討することから、幼稚園同士であるA園卒群と他幼卒群の比率の差を検討する。その結果、B小学校の比率はA園卒群が高く、他幼卒群はC小学校の比率が高いことが示された。最も比率が高いA小学校の比率には差がなく、近隣に立地しているB小学校とC小学校の学校間の差が大きいと考えられることから、両群の差が小学校教育の差によるものとはいえないと考えられるが、両群間に差が見られた場合、B小学校とC小学校出身者の比率に差があることを考慮して考察する必要

表4 群別の男女比と卒業した小学校の比率

群	データ数	性 別		卒業した小学校			
		男 子	女 子	A小学校	B小学校	C小学校	その他
A園卒	69	28(40.6%)	39(56.5%)	36(52.2%)	26(37.7%)	6(8.7%)	1(1.4%)
他幼卒	97	39(40.2%)	57(58.8%)	44(45.4%)	16(16.5%)	23(23.7%)	14(14.4%)
他保卒	65	39(60.0%)	26(40.0%)	24(36.9%)	29(44.6%)	5(7.7%)	7(10.8%)
計	231	113(47 %)	125(53 %)	104(45.0%)	71(30.7%)	34(14.7%)	22(9.5%)

*数値は判別したデータ数

があると考えられた。

2-3 教科の学習に対する意識

各教科や学習の時間が好きかについて、A園卒と他園卒の生徒とでは差があるのだろうか。各教科を好きな生徒の比率を求め、比較した(図1)。

その結果、「好き」と回答した率が最も高い教科は、他の群は「体育」であるのに対し、A園卒群は「美術」であること、10教科中「国語」「数学」「英語」「音楽」「美術」「技術・家庭」の6教科でA園卒群の比率が最も高いことがわかった。また、教科別に「好き」と「それ以外」の比率について検討した結果、「数学」は $\chi^2_{(2)}=13.72$, $p<.01$ でA園卒群の「好き」が有意に多く、「美術」は $\chi^2_{(2)}=4.66$, $p<.10$ で、A園卒群の「好き」が多い傾向がみられることが示された。また、「国語」は、A園卒群が他保卒群との比較で有意に高かった($\chi^2_{(2)}=4.38$, $p<.05$)。ただし、他保卒群はA園卒群より男子の比率が高いため、国語は女子が好むという教科の好みの性差の影響が考えられる。

以上から、A園を卒園した生徒は、「美術」が最も好きで、「美術」と「数学」は他の生徒たちより好きな生徒の比率が高く、「国語」も好きな割合が高い傾向にあることが明らかになった。

また、「数学」と「美術」を好きな生徒の比率が高いという結果の要因についても、A園の保育内容だけに帰することはできないだろう。A園の独自性が豊富な造形表現体験だけではないことも考慮すべきであり、幼稚園を選択する際にA園を選んだ家庭の環境や教育方針の影響が最も強いと考えられる。とはいえ、A園での造形指導で目指していたものは、みんなの中で自分らしく表現することを楽しみながら「表現する力」「考える力」「つくる力」を獲得することであり、図1で他群より「好き」率が高い科目や半数以上が「好き」と回答した科目は、表現力や数量的・図形的思考力、創造力が求められる科目であった。A園での豊富な造形体験が、将来、表現や問題解決を求められる教科を好むようになる基礎を培う一助になっていた可能性もあるが、その関係性については明確ではない。

また、幼児期の造形活動は、手と目と脳の協応関係を育み、感性と創造性を培い、心身を共に発達させていくと考えられている。さらに実践の影響を考察するためには、それらが最もいかにされる科目である「美術」につい

てより詳しく検討する必要があるだろう。そこで「美術」についてみると、A園卒群の87.0%が「好き」で、10教科中最も得点が高く、「嫌い」と回答した生徒は、一人もいなかった(図2)。

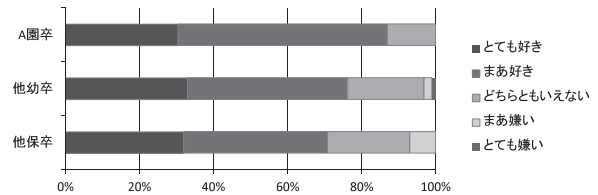


図2 「美術」の授業の好き嫌い

A園卒群に美術嫌いが一人もないということは特筆すべきことであるが、学校全体でも嫌いな生徒が少なく、全国調査の結果との比率(表3)からもA中学校の美術教員の指導力がその一因になっていると考えられる。

2-4 部活動への取り組み

中学校生活の中で、部活動は大きな比重をもっている。学校の教科学習以外の場面についても、A園卒群の特性を可能な範囲で検討する。まず、部活動への取り組み状況について比較する(図3)。

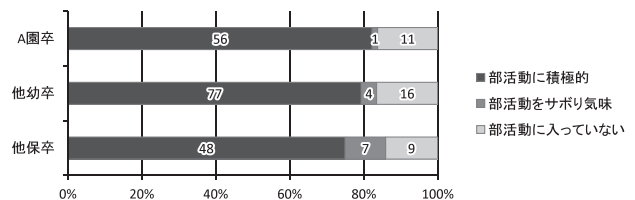


図3 A園卒群の部活動への取り組み状況

その結果、部活動への加入率にはほとんど差がないが、A園卒群では積極的に参加している比率が82%で最も高く、「部活動に入っているがさぼり気味」と回答した生徒は、A園卒群では1名であったのに対し、他幼卒群と他保卒群ではやや多かった。A園を卒園した生徒は、中学校での部活動に積極的に参加していることがわかった。

2-5 学校外の状況

次に、学校外での様子について検討する。普段のことをどのくらいするかという質問項目について、「する」と回答した比率を求めた(表5)。

その結果、群間に統計的な差は見られなかったが、現在の中学生在が、学校外の普段の生活において、美術館や

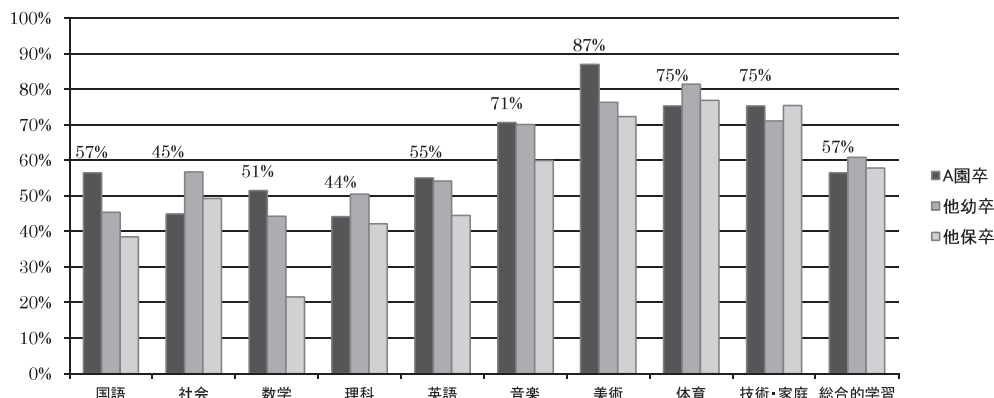


図1 各教科を「好き」と回答した比率

表5 普段の生活で「する」と回答した比率

	本を読む	新聞の ニュース 欄を読む	美術館や 博物館に 行く	ペットや動 植物の世話 をする	読みたい本 を本屋で探 して買う	読みたい本を 図書館で探し て借りる	ゲーム をする	パソコンで ゲーム以外の ことをする	習い事等 に行く
A園卒	73.5%	44.8%	14.7%	42.6%	79.4%	38.2%	64.7%	76.1%	78.8%
他幼卒	77.3%	46.9%	16.7%	53.7%	86.5%	27.8%	63.2%	87.5%	80.9%
他保卒	66.2%	41.5%	19.0%	50.0%	73.8%	32.3%	64.5%	81.5%	78.8%

博物館に行くことがほとんどなく、本屋で本を買い、パソコンや習い事等に時間を費やしている傾向が浮かび上がってきた。A園卒群と他群のする率の差が5%以上ある項目は、「読みたい本を図書館で探して借りる」だけが高く、「ペットや動植物の世話」「パソコンでゲーム以外のことをする」は低かった。図書館を利用する傾向が高いのは、知的な関心の高さをうかがわせるが、統計的には差がなかったことから、学校外の生活の違いは明確にはなかった。

2-6 家庭教育の状況

学校外の教育で最も大きな影響を受けているのは、家庭教育であろう。A園周辺には多数の幼稚園があり、保護者が通園条件や教育方針や保育内容から幼稚園を選択することから、A園を選んだ家庭の教育方針に特徴がある可能性がある。A園は、「創造・協調・丈夫なからだ」を柱とし、のびのび保育を目指して制服がなく、豊かな表現力を培う造形表現活動、丈夫なからだをつくる体操等があることを特徴としている。幼児期の家庭環境の特徴を検討する手がかりとして、幼児期の習い事について検討する。保育園とは習い事に行くことができる時間が異なるため、ここでは、他幼卒群との比較を行う。

覚えている範囲での記載であるが、A園卒群で何かの習い事をしていたのは67.6%であり、複数の習い事をしていた比率は36.2%であった。他幼卒群もほぼ同様に67.0%が習い事をしていたと回答しており、複数の習い事をしていたのが32.0%であった。習い事をしている比率にはほとんど違いがなかったため、その内容について整理した(表6)。

表6 幼児期の習い事の内訳と比率

	勉強	スポーツ	身体表現	音楽表現	造形表現
A園卒	27.5%	68.1%	13.0%	23.2%	0.0%
他幼卒	29.9%	41.2%	8.2%	29.9%	6.2%

その結果、A園卒群は、他幼卒群と比較してスポーツの習い事をやっていた比率が高かった。幼児期の習い事は保護者の意向が反映すると考えられる。ダンスなどの身体表現の比率も高いことから、身体活動を重視した教育方針の家庭が多いことが推察された。幼稚園内で、サッカーや体操や新体操などの課外教室が開催されていたことも関係するであろう。造形については、習い事をさせていた家庭がなかったことから、A園卒群の幼児期の造形面での影響は、保育内での造形体験によるものであることが示された。

以上から、A園を卒園した中学生たちの学習面、学校内外の生活における特性が示された。次に、幼児期に関する調査結果から、検討する。

3. 幼児期の教育の影響

3-1 幼児期の思い出

幼稚園や保育所(園)で一番楽しかったことを尋ねた結果について検討する。自由記述を整理し、複数回答については最初にかかれた事柄を取り上げてカテゴリ別に分類したところ、「遊んだこと」にかかわる記述が最も多く、230人中131人、57%が一番楽しかったこととしていた(図4)。「遊んだこと」と書かれていたものもあったが、「友達と遊んだこと」のようにどこが楽しかつ

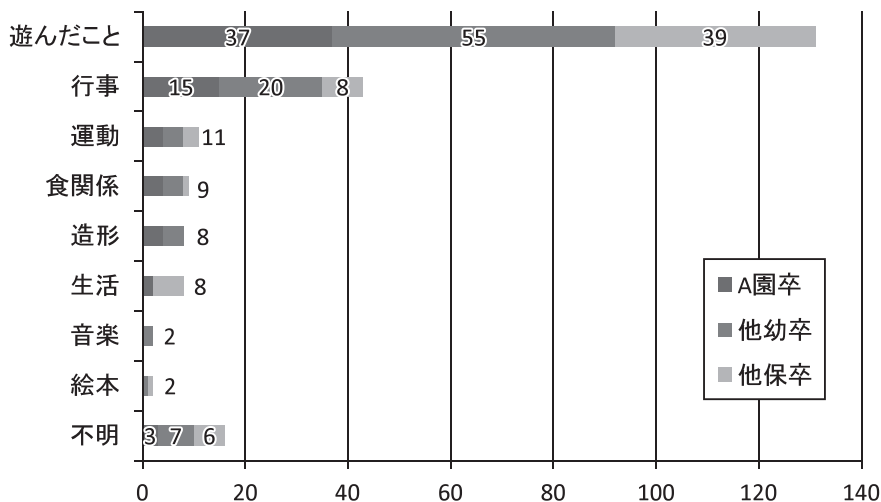


図4 幼児期の思い出「一番楽しかったこと」の回答数

たか書かれているものもあり、「誰と」「何をして」「どこで」「どのくらい」のどの観点について書かれているかによって、遊びの何に楽しさを見出していたかには個人差があることがわかった。次に多かったのが行事にかかわる記載で、43名、18.7%であった。次は、ドッジボールなどの運動関係で11名であるが、「遊んだこと」の中には遊具での遊びや外遊び、「行事」には運動会が含まれており、身体的な活動は楽しい思い出となることが多いことがわかった。

造形活動を1番の思い出としたのは8名であり、A園卒群は4名で約6%、他幼卒群は4名で約4%であり、他保卒群にはいなかった。

また、A園卒群は、他群と比べて遊んだことの記載率が低く、行事関係の記載率が高かった。行事については、「お遊戯会」「お泊まり会」「運動会」が多かったが、「梨狩り」「動物とふれあう行事」「クリスマス会」などの記載もあり、A園の保育には様々な行事があり、造形活動以外にも特徴的な保育内容があったことが推察された。また、A園卒群の回答の中には、「つくりんぼランド」という筆者らが実践した造形表現活動の名称を1番楽しかったこととして記載しているものが2回答あり、幼児期に受けた教育内容の記憶は児童期を経て中学生になっても残るということがわかった。

3-3 幼児期の造形体験

幼児期の造形体験に関する項目について検討する。幼稚園や保育所(園)で絵を描いたり何かをつくったりしたことを覚えているかという質問に対し、覚えていないと回答したのは、A園卒群では、17名25%であるのに対し、他園卒群は63人38.9%であった。A園卒群・他幼卒群・他保卒群の幼児期の造形活動の記憶の有無を比較した結果、A園卒群の覚えている比率が有意に高かった($\chi^2_{(2)}=9.73, p<.01$)。以上から、A園を卒園した中学生は幼児期の造形表現活動をよく覚えている傾向があることが示された。

また、覚えているとして記載された42の造形活動の中には、明らかに筆者らの実践に関する記載とわかるものが19あり、使った材料についての記載があるものが8で、ティッシュの箱や牛乳パック、ボタン、綿などが書かれていた。具体的には、「いろんなもの(ボタンなど)をいろいろと自由に作りました」「つくりんぼっていう教室で工作をいっぱいしたり紙で紙粘土をつくった」「画用紙や牛乳パックなど身近なものを色々使って絵を描いたり工作をしたりした」「ティッシュの箱で犬をつくった」などである。また、「つくりんぼ」という名称や取り組んだプロジェクト活動の名称を書いている回答が8あった。「宇宙」をテーマにしたプロジェクト活動に関する記述には、「宇宙センター」という名称を記したものがあり、一部ではあるが、6年以上経過しても幼児期の造形活動を詳細に覚えている中学生がいることが明らかになった。

4. まとめと今後の課題

本稿では、幼児期の造形体験が、その後の成長にどのように影響を与えたかについて、中学生を対象に調査を行った。幼児教育が子どもの成長や興味にどう影響したかについては、子どもを追跡すること自体が難しいという面からも研究例が少ない。本稿は、幼児期と中学生をつなげようとしたこと、そして幼児期に表現傾向や自発性を尊重した造形表現活動を体験した群を、その一部ではあるが追跡して調査することができたという点において評価することができるだろう。今回の分析結果については、造形活動が保育内容の一部にすぎないことや小学校教育や家庭教育の影響の大きさを考えると曖昧さが残るが、幼児期の造形体験が中学生の記憶に残り、何らかの影響を与えていることを明らかにすることができたといえる。

特に、A幼稚園卒の中学生は「美術」が好きな傾向があり、幼児期の造形活動の記憶には、他園卒の中学生と比較しても具体性があることは特徴的であった。ただし、好きであることや記憶していることと実際の造形表現力の豊かさとの関係は不明であり、造形表現面での影響については、美術の学習場面での評価から検討する必要があるだろう。また、自由記述欄からは、その影響には個人差があることが示唆された。今後の課題としては、A園での造形体験の影響を中学の「美術」の授業を通してより詳細に検討し、さらに事例的な検討を加える必要があるだろう。

幼児教育の影響について検討した本研究は、また緒に付いたばかりである。幼児教育における造形表現活動の在り方を探求し、集団の中で個を尊重する指導を通して「表現する力」「考える力」「つくる力」を育むことを目指してきた実践研究の成果は、幼児期だけではなく、将来の開花から評価したいと考えている。幼児期の教育がその後の成長にどのような影響を与えるのかについて、今後も研究をすすめて、その検討を通して、幼児期の造形教育の意義についても考察していきたい。

文献

- Benesse 2006 学習基本調査 Benesse教育研究開発センター
- 東山明, 東山直美 1999 子どもの絵は何を語るか: 発達科学の視点から NHKブックス
- 横 英子 2004 “みんなの宇宙” —「表現スタイル」を手がかりとしたプロジェクト・アプローチの試み— 日本乳幼児教育学会第14回大会発表論文集, 148-149.
- 横 英子 2006 幼児の「表現スタイル」に配慮した保育実践 保育学研究 第42巻第2号, 35-42.
- 横 英子 2008 幼児の表現活動と造形教材Ⅱ—教材選択状況からの検討—日本保育学会第61回大会発表論文集, 670.